

Title	福岡正夫著 『歴史のなかの経済学：一つの評伝集』
Sub Title	
Author	若田部, 昌澄(Wakatabe, Masazumi)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2000
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.93, No.1 (2000. 4) ,p.275- 278
JaLC DOI	10.14991/001.20000401-0275
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20000401-0275">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20000401-0275</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



福岡正夫 著

『歴史のなかの経済学——一つの評伝集——』

創文社，1999年，477頁+ix

### I.

同僚の、とくに同世代の経済学者と会話を交わして、史の専門家である私が一番驚かされるのは、いわゆる古典を読んだことがない人が多いことである。かといって、彼らが古典にまったく関心がないわけではない（なかにはそういう人もいるが）。読んだことがないとすれば、目の前の研究課題を追求するのに忙しくて時間がないのだろう。ヒュームやスミス、リカードやケインズを1度でも読んだひとはただちに理解できるように、古典は大変面白いが、読むのには骨が折れる。いかなる学問であれ皮相な理解が望ましくないのと同様、古典についても深い理解が望ましい。古典は書かれた時代に制約されているから、現代とは異なるさまざまな約束事を理解しなくてはならない。だから学史家がいるし、良き案内が必要である。

しかしその「良き案内」を提供すべき学史の側に問題がある。第一に、特に日本に顕著だが、新書などの形で入手しやすい経済学史の啓蒙書では、主流派経済学は往々にしてかなり戯画化されて描かれている。経済学を人体にたとえれば、骨の部分だけを取り出してきて批判し、血や肉、内臓、神経にあたる部分は無視してしまうようなことが行われている。第二に、その理解自体にも問題がある。理論の意義を認めない批判は論外としても、主流派に代替的な理論が何をどのように達成して

いるかを謙虚に踏まえることなく過度に主流派経済学に批判的なものも多い。第三に、かつて森嶋通夫が指摘した問題がある。ゲーム理論、計量経済学の歴史のように、現代の経済学がますます学史の守備範囲となるにつれて、今後学史家に必要な数理的計量的素養はますます増えて行くだろう。しかし、ここでも特に日本の場合、学史家の訓練にかなり問題がある。現在はかなり改善されているとはいえ、日本の大学院教育は専門分野への早期特化を特徴としているから、学史研究者は学史だけ、それも自分の「専門分野」だけを研究対象にすればよいことになる。このような訓練は分業の観点からは望ましいが、その成果を経済学者や一般読者にいかに伝えるかという点で問題がある。

そこから、経済学に興味を持つ人に役立つ「良い案内」を書くためには、まず当然のことながら古典を丹念に読み、かつ現代理論に通暁していなければならないということになる。この両方の条件を満たしている例はなかなかないが、このたび刊行された福岡教授の評伝集はほぼその2つを満たしているといつてよい。

### II.

本書は、福岡正夫教授がここ20年近く、経済学者の生誕、死去あるいは主著刊行の100周年や200周年記念の節目ごとに書かれた評伝論文を収録したものである。結果として取り上げられたのはアダム・スミス、カール・マルクス、ウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズ、レオン・ワルラス、フランシス・エッジワース、ヨーゼフ・シュンペーター、アルフレッド・マーシャル、アーサー・ピグー、ジョン・メイナード・ケインズ、フランク・ラムゼーの10人である（正確にはマーシャルは主著の『経済学原理』で、ケインズには経済学と哲学の2章が充てられている）。この人選自体は教授の執筆活動の意図せざる結果であり、教授も述べられているようにあらかじめ定められたマスター・プランがなかったという点ではケインズ

の『人物評伝』あるいはシュンペーターの『十大経済学者』に近い。さらに言えば、経済分析への貢献を主眼とし、また題名の由来を解きながら、「経済学者たちがその創造過程で社会や文化の歴史からどのような影響を受けたかというよりも、むしろ彼らがみずからの創造物をつうじてそれらの歴史にどのような影響を与えたかという意味合いのほうを強く含んでいる」(v頁)と述べられているように、科学としての経済分析の発展に関心を寄せたシュンペーターの学史観に近い。

本書の特徴としては、なによりもまず優れた平衡感覚をあげるべきだろう。それは三つの面によくあらわれている。第一に批判のための批判、あるいは賞賛のための賞賛を避けるように評価面での公平性を保とうとする点があげられる。たとえば、マルクスほど毀誉褒貶の激しい経済学者はいないだろう(経済学者と認めない人すらいる)。もとの掲載誌が一般向けということもあって、ここでの福岡教授はできるだけ技術的でない説明に終始している。しかし、注目に値するのは、森嶋通夫の解釈を紹介しながら、ベーム・バヴェルク以来いわれてきた『資本論』第一巻と第三巻の矛盾』を内在的に理解しようと試みていることである。経済学史の標準的な教科書として有名なBlaug(1997)が、この点で非常にマルクスに断罪的なのとは大きく異なる。一方で、マルクスに限らず理論の整合性で問題があるところは過不足なく指摘されている。第二に、評伝としての体裁があげられる。ふんだんに逸話を盛り込みながらも、単なる羅列に墮すことなく、伝記的情報と業績の分析とがほどよく組み合わせられているのは見事である。第三に、先行研究の巧みな消化があげられる。それは、章末注にあげられた参考文献、さらにすでに原論文刊行から10年以上が経過しているものについて施された補注による最新の研究文献情報から窺い知ることができる。なかでもワルラスについて近年刊行されたDonald A. Walker(1996)の研究への評言(180-2頁)は重要であり、現在経済学史の専門誌上でとりあげら

れつつある論点(どの時点でのワルラス『要論』を彼の「成熟した」モデルとみなすべきか)を的確に指摘している。

本書の第二の特徴としては、理論分析に力点が置かれていることである。その中には普通の学史の教科書・概説書ではあまり言及されないことが多数含まれている。さきあげたマルクスの取り上げ方がそうであるが、スミスの経済成長論を現代の内生的成長論の原型と位置付けるだけでなく、スミスの外部性概念にparametricな規模の経済を唱えたChipman(1970)を参照するあたりはさすがである。その他にも、ジュヴォンズについては経済量の次元(dimension)の問題、エッジワースについては極限定理、コアの理論やHarsanyi-Vickrey流の新功利主義を踏まえた上での評価など、例には事欠かない。

本書の第三の特徴は、さらに具体的な内容に関するものである。スミスとマルクスにも一章ずつを割いているが、本書の白眉はなんといってもいわゆる「限界革命」以降の近代経済学史、とりわけケンブリッジ学派である。そこには、玄人向けの心憎い配慮が感じられる。たとえば、ワルラスの最大の貢献が一般均衡理論の構築にあったことはいままでもない。その点を知悉する教授は、それには贅言を費やさず、限界原理応用の第二段階ともいえる完全分配定理をめぐる問題と、貨幣理論を主に論じている。ことに後者は重要性にも関わらず取り上げる論者が少ないので注目に値する。さらに、エッジワース、ピグウ、ラムゼーは、内外を問わず研究層が薄い。ことにピグウは、ケインズ革命と新厚生経済学台頭の余波に埋もれて、いわば忘れられた存在であり、評者の知る限り最近では塩野谷裕一教授の研究を除いてほとんど取り上げられることがない。新しい古典派かケインズ派かを問わず、近年のマクロ経済学が労働市場のミクロ分析を重視しているのは周知のことであるが、教授は今こそ労働経済学に多大な関心を寄せたピグウの業績全体を再検討する機が熟しているのではないかと示唆している。フランク・ラム

ゼーは、26歳で天逝するまでに成長論のラムゼー・モデル、最適課税理論、そして確率論について真に先駆的な3論文を書いた。ケインズの哲学的側面にも詳しい教授の評伝は、この天才の業績について語ってあますところがない。大学院初級あるいは学部上級の講義でラムゼーに言及するときには、この論文を参照することで学生の理解が深まるだろう。

教授がことのほか親しみを感ぜられているケンブリッジ学派の全体像をどう見るかという問題についても、類書にはない視点が盛り込まれている。現在ケンブリッジ学派というと、ジョン・ロビンソン、ニコラス・カルドアに代表されるポスト・ケインジアン viewpoint からとらえらるが、教授の叙述から浮かびあがるケンブリッジ学派は、むしろ新古典派総合のそれである。それはなによりもまずケインズ自身にあてはまる。生涯を通じて絶えざる自己革新を遂行したケインズは、いわゆるケインズ革命によって正統派と「革命的」な断絶を果たしたかのように見える。だが、その『一般理論』においてすらケインズは古典派の世界との最終的な調停を示唆していたし、最晩年には第二次大戦後の国際機構を分析する過程で、明確に古典派の思考（「アダム・スミスの知恵」）に復帰していった（404-6頁）。読者はこの記述を、世間で出回っているケインズの解説書と大いに比較してもらいたいものである。

### III.

このように、本書は大変優れた評伝集であるが、この機会に教授のご意見をもう少しお聞かせ願うという意味で2つの論点を提起してみたい。

第一の論点は、本書全体の視角の限定に関わる。これは経済学でいえば分析の切り口を定めるために当然必要であるが、教授は、経済学者の卓越した業績が「歴史にどのような影響を与えたか」という観点から「歴史のなかの経済学」を考察している。問題は、経済学者によって教授のアプロ

チが完全な成功を取める場合とそれほどでもない場合に分かれることである。それがもっとも感じられるのがケインズである。

ケインズを論じるのは難しい。教授自身哲学者ケインズと経済学者ケインズについて一章ずつ割いているように、ケインズという人物は多彩な顔を持っている。しかし、経済学者としてのケインズを論じる場合にも忘れてはならないのは、ケインズが政策に関与することで、歴史に影響を与えながらも歴史に影響を受けたことである。もとより、この2つを截然と分けるのは不可能であるが、Peter Clarke (1988) の画期的な研究に代表される政策思想史研究は、公私にわたる文書を利用しながら、ケインズが転変する現実の課題と格闘する中で理論を構築していったことを丹念に浮き彫りにしようとしている。このような研究を教授はどのように評価されるだろうか（この点は、単に予算制約、すなわち紙数の問題かもしれない。現実と理論との関係は教授のケインズ伝（福岡（1995））でははるかに書きこまれていることを言い添えたい）。

第二の論点は、学史の伝統的な区切り方に関わるものである。本書は評伝集なので学史の研究書とは趣を異にするし、また古典派自体は本書の範囲ではないことは承知の上で、あえて「古典派」と「近代経済学」との関係についてお尋ねしたい。というのも、教授は価値論上のマーシャル『原理』の貢献について触れたところで、次のように述べられているからである。マーシャルには「ミルを出発点とする社会的需給両曲線による価格決定の図式があり、それらの「ミクロ的基礎」はむしろ後知恵としてあとから考えられたように思われる」（285頁）。これは、非常に重要な指摘であるが、このような観点をさらに押し進めると、いわゆる「限界革命」はどのように捉えられるだろうか。それは価値論においてはジェヴォンズの主張にも関わらず、古典派ですでに大枠が提示された需給均衡論の彫琢という意味で「革新」なり「改良」ではあっても、「革命」というには言葉が

強すぎるのだろうか。また、近代経済学の創始者たちの間での完全分配定理をめぐる論争も興味深い。均衡においては企業者には利潤も損失も生じないというワルラスの考えに対して、エッジワースは抵抗を示した。というのも、ドイツのマンゴルト同様に古典派的思考を継承するエッジワースにとっては、事業の拡大を目的としない企業者という存在は考えられなかったからである(211-2頁)。後に、エッジワースはワルラスの立場に近づくが、ここでも古典派との意外な連続性がみられる。さらには、価値論だけでなく、成長・発展論、貨幣・銀行論、国際貿易論などを視野に入れた場合、いわゆる古典派と近代経済学の連続と断絶はどのように評価されるだろうか。評伝という性質上、本書では一人一人の経済学者を単位にしているが、それらをつなげてみたときに何が言えるのか、教授にお聞きしたいところである。

最後に、本の体裁に関わる小さな問題について簡単に指摘させていただきたい。原論文のほとんどが掲載された『三田学会雑誌』とは異なり、本書は縦書きである。評伝、あるいは日本語の本としては縦書きがふさわしいと判断されたのだろうが、数式を多用される教授の叙述スタイルからは、横書きのほうが読みやすかったのは確かである。また、人名索引は原語を併記していただくことで、さらなる便宜が図れただろう。もとより原音どおりの表記は不可能であるが、いくつかの表記に疑問を感じた(英語でMcGregorはマグレーと表記するのが原音に近いだろう)。

しかし、これらは文字通りの望蜀というべきで、本書の価値を何ら損なうものではない。この本を読むことは、ただただ楽しいものであった。教授は本書が「スミスからケインズにいたる学説史の手引書」として役立つことを念じられておられる。その目的は、十二分になんかえられているといえよう。冒頭述べたように昨今経済学史は経済学者から垣間見られないきらいがあるが、本書のような格好の手引きによって、一人でも多くの読者が過去の偉大な経済学者たちの業績に触れ、そして経済学を前進させる機会を得ることを望みたい。

若田部 昌 澄

(早稲田大学政治経済学部助教授)

#### 参 考 文 献

- 福岡正夫(1995)『ケインズ』東洋経済新報社。  
Blaug, Mark (1997) *Economic Theory in Retrospect*, 5<sup>th</sup> edition, Cambridge: Cambridge University Press.  
Chipman, John S. (1970) "External Economies of Scale and Competitive Equilibrium," *Quarterly Journal of Economics*, Vol.84, No.3, August, pp.347-385.  
Clarke, Peter (1988) *The Keynesian Revolution in the Making, 1924-1936*, Oxford: Clarendon Press.  
Walker, Donald A. (1996) *Walras's Market Models*, Cambridge: Cambridge University Press.